

セリ科ホソバノミシマサイコの帰化 (大橋広好^a, 伊藤隆之^b)Hiroyoshi OHASHI^a and Takayuki ITOH^b: A New Record of Introduced *Bupleurum angustissimum* (Franch.) Kitag. (Umbelliferae) in Japan

ホソバノミシマサイコ *Bupleurum angustissimum* (Franch.) Kitag. が愛媛県に帰化したので記録しておきたい (Figs. 1, 2). ホソバノミシマサイコは中国北部から東北部, モンゴル, 朝鮮半島に自生する. 伊藤は2003年6月29日に本種が愛媛県今治市砂場町二丁目, 西瀬戸自動車道 (しまなみ海道) の側道の法面に帰化していることに気づいた. この場所には中国からの輸入と推定されるメドハギ類を主としたマメ科植物が多数帰化していることを既に報告した (大橋他 2003, 2004). これらは西瀬戸自動車道路新設工事の際に法面に吹き付けられた種子に由来すると思われる. それに混ざってナデシコ科イワコゴメナデシコも見られた (大橋, 伊藤 2004). ホソバノミシマサイコはこれらの帰化植物と共通の場所に生育することから, 本種もまた中国からの移入と考えられる. しかし個体数は少なく, 吹き付け目的に輸入されたマメ科種子に混ざっていたものであろう.

ホソバノミシマサイコは最初にヨーロッパの *Bupleurum falcatum* L. の変種として記載され, 後に *B. scorzonrifolium* Willd. の亜種と見なされ, さらに種にあげられた (北川 1947). 最近の中国や韓国のフロラでは本種は独立種として扱われている (Li and Sheh 1979, Lee 1996). *B. scorzonrifolium* に比べて枝の開出すること, 葉が細長いこと, 小総苞片が花よりも短いことが特徴とされる (北川 1947). 今回の帰化品はこれらの特徴をよく備えている (Figs. 1, 2A). しかし, *B. scorzonrifolium* には葉は非常に細長い, 枝の開出程度は少なく, 小総苞片は花よりも長い (Fig. 2B) ものがあ一方, これらの区別点とされる形質がホソバノミシマサイコとの間で連続的に変異するように見える. ホソバノミシマサイコを独立種とする見方には疑問がある.

ホソバノミシマサイコは明らかにミシマサイコ群 *Bupleurum falcatum* complex の一型である. ミシマサイコ群は広い形態的多様性を

示し, 多くの型が分類群として命名されている. しかし, ミシマサイコの実体についてはまだ明らかではない. 現状では多くの考えがあって, その学名の扱いも多様である. 日本産のミシマサイコについてみると, 最初はヨーロッパの *B. falcatum* と同一種と考えられた (Miquel 1867, Franchet and Savatier 1875, Yabe 1902). この意見は今日も支持されている (大井 1953, Ohwi 1965, Ohba 1999). ミシマサイコはユーラシアの温帯に広く分布し, 形態的変異の幅が広くて多型であるが, 変異は連続し, 1つの種を形成するとする見方であり, 種を最も大きく規定している. この説に対してミシマサイコは *B. falcatum* とは別個の分類群であるとする多くの説がある. シベリアからモンゴル, 中国, 朝鮮, 日本に分布する *B. scorzonrifolium* に当たるとする説 (Li and Sheh 1979, Yamazaki 2001), さらに日本と朝鮮半島に分布する独立種 *B. stenophyllum* (Nakai) Kitag. であるとした説 (北川 1947) がある. 北川説 (1947) はミシマサイコを最も小さく種に規定している. また, 独立の分類群であるとしてもミシマサイコは変種ランクで認められるとする意見もあり, *B. falcatum* の変種としては var. *komarowii* Koso-Polj. (原 1954, 北村・村田 1961), *B. scorzonrifolium* の下では var. *stenophyllum* Nakai (Nakai 1937, 北川 1982, 大井・北川 1992) とされる.

最近, ミシマサイコ群を広義のミシマサイコ *B. falcatum* s. lat. として扱い, 日本, 韓国, 中国, ヨーロッパから集めた資料に基づいて葉緑体 DNA を分析し, 系統関係を調べた研究 (Matsumoto et al. 2004) が発表された. この中にはホソバノミシマサイコは含まれない. この結果によれば, 東アジアのミシマサイコはヨーロッパの *B. falcatum* s. str. と系統的に区別される. また, 日本の材料は中国の *B. scorzonrifolium* と系統的に異なるとされた. 今後さらに葉緑体 DNA 上の変異と染色体数および分類形質とが関連づけられれば,

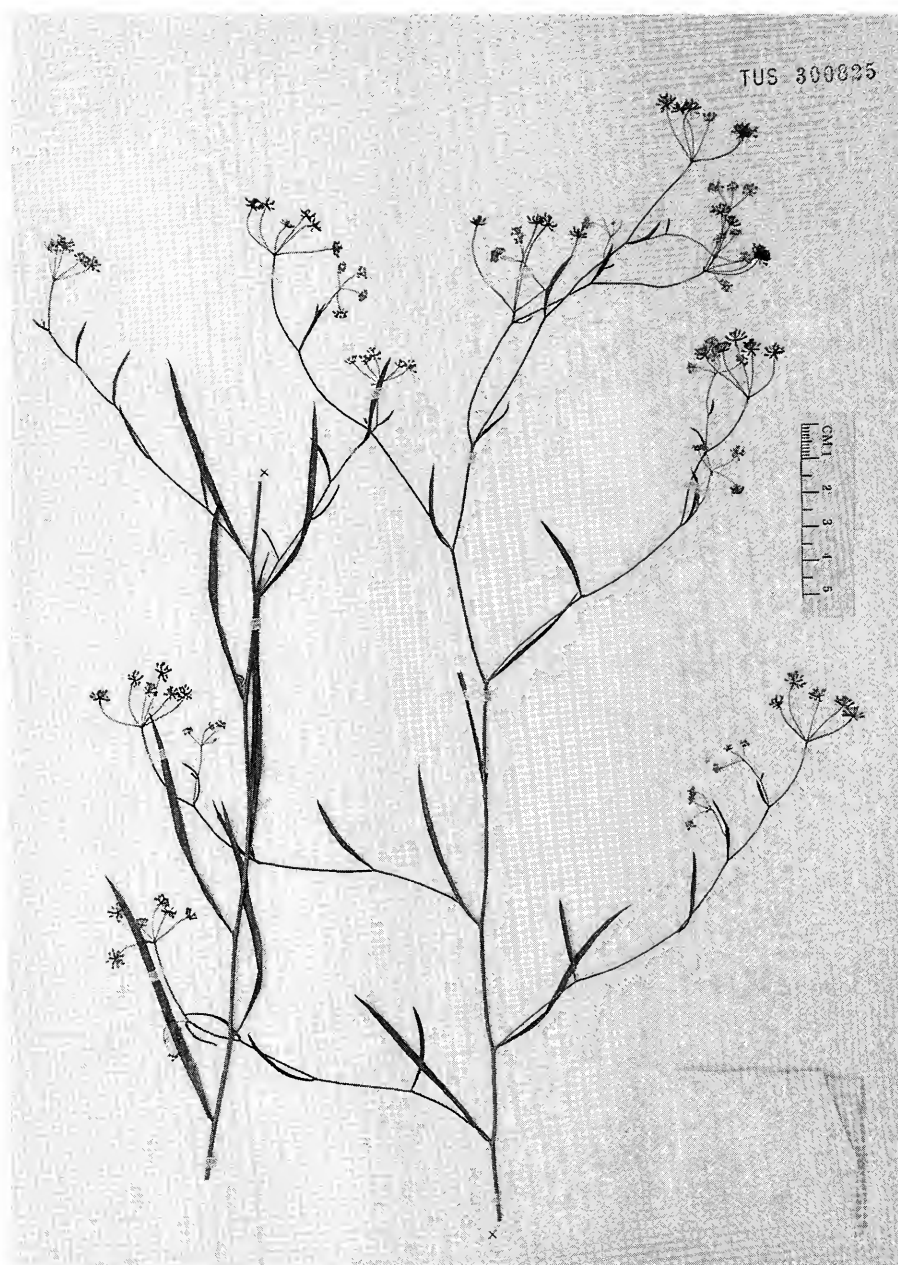


Fig. 1. *Bupleurum angustissimum* (Franch.) Kitag. Voucher specimen: Ehime Pref., Imabari-shi, Saba-chô. T. Itoh 23628 (TUS 300825).

ミシマサイコ群の分類と学名が安定すると期待できる。

ホソバノミシマサイコの図は多い。中国植物誌55巻第1分冊図147(1979)、中国高等

植物図鑑補編2: 688, 図9013(1983)など、また野田光蔵「中国東北区(満州)の植物誌」(1971)にも図がある。韓国では Lee: Lineamenta Florae Koreae pl. 254: 1522(1996)に

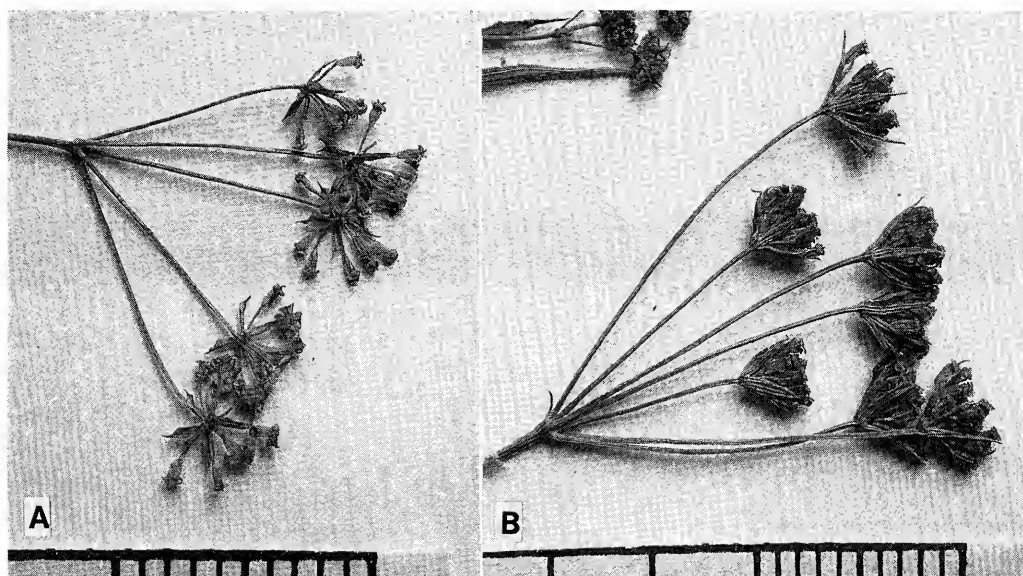


Fig. 2. A. Umbellet of *Bupleurum angustissimum* showing flowers and involucels. Enlarged from Fig. 1. B. Umbellet of *B. scorzonrifolium* showing longer involucels than flowers. Voucher specimen: China, Xinjiang, K. Kawamura 38332 (TUS 197261).

標本写真があり，北朝鮮では Im Rok Jae: *Flora Coreana* 5: 173, fig. 124 (1996) に線画がある。

Bupleurum angustissimum (Franch.) Kitag. in *J. Jpn. Bot.* 21: 97 (1947) & in *Bull. Nat. Sci. Mus.* 5(1): 9, pl. 1, fig. 2 (1960); Li & Sheh in *Fl. Reipub. Popul. China* 55(1): 271, fig. 147 (1979); W. T. Lee, *Lineamenta Fl. Koreae* 784 (1996).

B. falcatum L. var. *angustissimum* Franch. in *Nouv. Arch. Mus. Hist. Nat. ser. 2*, 6: 18 (1883) & *Pl. David.* 1: 138 (1884).

B. scorzonrifolium Willd. subsp. *angustissimum* (Franch.) Kitag. in *Rep. Inst. Sci. Res. Manch.* 4: 105 (1940).

和名：ホソバノミシマサイコ

証拠標本：愛媛県今治市砂場町2丁目，西瀬戸自動車道（しまなみ海道）の側道，法面に帰化（Japan. Shikoku. Ehime Pref., Imabari-shi, Saba-chô, 2-chôme, a road along Nishiseto Expressway (Shimanami-Kaido), naturalized). 29 June 2003. 伊藤隆之 T. Itoh 23628 (TUS

300825).

引用文献

- Franchet A. R. and Savatier P. A. L. 1875. *Bupleurum* L. *Enumeratio Plantarum in Japonia Sponte Crescentium.* 1(1): 179–180. F. Savy, Paris.
- 原 寛 1954. 日本種子植物集覧. 第三冊. 被子植物-双子葉植物-古生花被植物 (1). フウロソウ科→ミヅキ科. 岩波書店, 東京.
- 北川政夫 1947. 日本産セリ科植物小記 (其五). *植物研究雑誌* 21: 95–100.
- , 1982. セリ科. 佐竹義輔, 大井次三郎, 北村四郎, 亙理俊次, 富成忠夫 (編), 日本の野生植物 草本 II: 276–290. 平凡社, 東京.
- 北村四郎, 村田 源 1961. 原色日本植物図鑑 草本編 II, 離弁花類. 保育社, 大阪.
- Lee W. T. 1996. *Lineamenta Florae Koreae*. Academy Books, Seoul.
- Li Y. and Sheh M. L. 1979. *Bupleurum* L. *Flora Reipublicae Popularis Sinicae* 55. Angiospermae, Dicotyledoneae. Umbelliferae (1). Science Press, Beijing (in Chinese).
- Matsumoto H., Ohta S., Yuan C. Q., Zhu Y. C., Okada M. and Miyamoto K. 2004. Phylogenetic relationships among subgroups in *Bupleurum falcatum* L.

- sensu lato (Umbelliferae) based on restriction site variation of chloroplast DNA. *J. Jpn. Bot.* **79**: 79–90.
- Miquel F. A. W. 1867. *Annales Musei Botanici Lugduno-Batavi*. **3**. C. G. van der Post, Amsterdam.
- Nakai T. 1937. *Notulae ad plantas Asiae orientalis* (II). *J. Jpn. Bot.* **13**: 471–491.
- 大橋広好, 伊藤隆之 2004. ナデシコ科の新帰化植物イワコゴメナデシコ. *植物研究雑誌* **79**: 376–378.
- , 根本智行, 伊藤隆之 2003. ハギ属の帰化植物4種. *植物研究雑誌* **78**: 50–54.
- , ——, —— 2004. マメ科の新帰化植物ナガバメドハギ (新称). *植物研究雑誌* **79**: 378–380.
- Ohba H. 1999. *Bupleurum* L. In: Iwatsuki K., Boufford D. E. and Ohba H. (eds.), *Flora of Japan*. **II**: 275–277.
- 大井次三郎 1953. *日本植物誌*. 至文堂, 東京.
- , 北川政夫. 1992. *新日本植物誌 顕花篇*. 改訂版. 至文堂, 東京.
- Ohwi J. 1965. *Flora of Japan*. Smithsonian Institution, Washington D. C.
- Yabe Y. 1902. *Revisio Umbelliferarum Japonicarum*. *J. Coll. Sci. Imperial Univ. Tokyo* **16** (4).
- Yamazaki T. 2001. *Umbelliferae in Japan I*. *J. Jpn. Bot.* **76**: 137–150.
- (*東北大学附属植物園津田記念館,
*愛媛県立西条高等学校)

新刊

□本間建彦:「イチョウ精子発見」の検証
平瀬作五郎の生涯 292 pp. 2004. ¥2,300.
B5版. 新泉社. ISBN: 4-7877-0415-X.

わが国の近代植物学発展の初期, 平瀬作五郎によるイチョウの精子発見は, 植物系統学上の世界的な業績として知らぬものはいない. 彼は東大理学部で図工だったが, 用器画の教科書を出版するなど, その方面でも知られていた. ところがイチョウの業績発表の後, 彼は東大を辞職して中学校の教師となり, その後は研究者としての仕事はほとんど見られないうまま終わった. 退官前後の事情は謎に包まれたままである. 著者はノンフィクション作家としてこの点に関心を持ち, 多くの資料を渉猟して推理を積み重ね, 本書を公表したものである.

前半は平瀬の生い立ちから東大へ勤めるようになるまでに, 彼の精神的成長に影響を与えた諸事件, とくに武士社会の崩壊, 黒船による開国, 明治維新などの時代背景が丹念に描写されている. 後半はイチョウの精子発見のいきさつ, 平瀬をとりまく人々の動き, 退職から晩年までを物語る. ノンフィクションだけあって, 普通の小説ならたくさん登場するであろう人物の架空の行動や心理描写は一切なく, 著者の推理のみによって話が進行する. 著者がしばしばこぼしているように, 平

瀬は自分の個人記録を残しておらず, 周囲の人々による資料もほとんどない. 彼の墓もどこにあるのか分からず, 菩提寺とみられる福井の寺も戦災で焼失しているという.

同じ頃起こった矢田部良吉の非職とともに, 平瀬作五郎の退官の事情は謎に包まれている. 私も昔, 国立科学博物館植物研究部に保存されていた個人の往復書簡の中に, その間の事情を知る手がかりがあるかと探ったことがあるが, 得るところはなかった. 本書は栄光と挫折を身をもって体験した平瀬作五郎氏の業績を, 改めて想起する資料としてお薦めする.
(金井弘夫)

□吉田外司夫:ヒマラヤ植物大図鑑 800 pp.
2005. ¥13,000. 山と溪谷社. ISBN: 4-635-53031-8.

地域としてはパキスタン, インド, ネパール, ブータン. チベットにわたる, 主として中高度から高山帯におよぶ顕花植物の, 花を主体にした植物図鑑である. まず36頁にわたってヒマラヤの植物地理, ヒマラヤ山脈の地域区分, ヒマラヤの植物の水平分布と垂直分布などと題して, 地域ごとの概念図を示した解説があり, ヒマラヤの地形や植物の全貌をつかむのに都合がよい. 文中の植物名には図版の出現頁が一々示されており, つまりこの図